

2019年3月19日

第11回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 日本のスポーツを支える「縁の下の力持ち」を表彰 受賞者決定および表彰式開催のお知らせ

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は、平成30年度「第11回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」(後援:公益財団法人日本スポーツ協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会)の受賞者を決定しました。

本賞はスポーツ振興に多大な実績を残すとともに、社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てているのが特徴です。また本賞は「功労賞(長年にわたるスポーツ振興への貢献や先駆者として実績を上げた人・団体を表彰)」と「奨励賞(今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待され、その年に極めて高い成果を上げた人・団体を表彰)」で構成されます。

なお、表彰式を平成31年4月15日(月)に如水会館(東京都千代田区)にて開催します。

第11回受賞者のご紹介(敬称略)



〔功労賞〕 荒井 秀樹(あらい ひでき)

パラノルディックスキー、ゼロからの挑戦

日本パラリンピックノルディックスキーチーム監督

推薦者: 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会



〔奨励賞〕 日本スケート連盟 スピードスケート科学サポートチーム

平昌オリンピックのスピードスケートマスタートおよび チームパシュート競技へ向けたレース分析サポート

推薦者: 公益財団法人日本スケート連盟

科学サポートチーム統括
紅 英信

※この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:小島)

■ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 概要

本賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰し、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどさまざまな分野において功績を挙げた「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てるとともに、受賞者の実像を通してチャレンジすることの尊さや、「努力は報われる」という信念を社会に広げることをめざした表彰制度です。

	対象	選考のポイント	賞典
功労賞	長年にわたるスポーツ振興への貢献や、先駆者として実績を挙げた人・団体	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的な取り組みであること(指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献した活動など)。	賞金 100 万円 (団体は 200 万円)
奨励賞	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を挙げた人・団体	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値する取り組みであること。たとえば世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たした指導者、研究者、サポートメンバー、審判、ジャーナリストによる活動など。	賞状・メダル 副賞

■選考委員会 (敬称略/五十音順/平成 31 年 1 月 1 日現在)

選考委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
選考委員	伊坂 忠夫	学校法人立命館 副総長、立命館大学 副学長
	衛藤 隆	東京大学 名誉教授、大阪教育大学 客員教授
	遠藤 保子	立命館大学 産業社会学部 特任教授 名誉教授
	景山 一郎	日本大学 生産工学部 教授
	川上 泰雄	早稲田大学 スポーツ科学学術院 教授
	北川 薫	梅村学園 学事顧問、中京大学 名誉教授
	草加 浩平	東京大学 大学院工学系研究科機械工学専攻 ディレクタ
	小島 智子	追手門学院大学 客員教授
	定本 朋子	日本女子体育大学 大学院研究科長・基礎体力研究所所長 教授
	篠原 菊紀	諏訪東京理科大学 共通教育センター 教授
	杉本 龍勇	法政大学 経済学部 教授
	高橋 義雄	筑波大学 体育系 准教授
	福永 哲夫	東京大学 名誉教授、早稲田大学 名誉教授、鹿屋体育大学 名誉教授
	増田 和実	金沢大学 人間社会研究域人間科学系 教授
	丸山 弘道	株式会社オフィス丸山弘道 代表取締役
	村田 亙	専修大学 ラグビー部監督
ヨコ ゼッターランド	公益財団法人日本スポーツ協会 常務理事、元バレーボール選手	

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリストなどから候補者の推薦を募り、2 回の選考委員会を経て決定

パラノルディックスキー、ゼロからの挑戦

あらい ひでき

荒井 秀樹(1955年生・北海道出身)日本パラリンピックノルディックスキーチーム監督

中学生時代に距離スキー部に入部。1972年札幌オリンピックの全道ジュニア強化選手に選ばれるなどの実力であったが、高校では家庭の事情により活動を中止。中央大学に進学しクロスカントリースキーを再開。東京都スキー連盟に所属し個人で国体などに出場しながら、ジュニアの指導にも当たっていた。それが縁で、1998年長野パラリンピックに向け障がい者ノルディックスキーの組織化、選手強化、指導、育成を懇請される。以来、長野、ソルトレーク、トリノ、バンクーバー、ソチ、平昌と6大会連続でメダリストを輩出。2004年には日本初のパラリンピックを目指す本格的な実業団チームを設立し、パラ選手・ガイド・監督・コーチが企業からのサポートを受け、トレーニングに専念できる環境を確立。さらにスキーのワックスなど、日本企業を巻き込んで競技技術発展にも大きく貢献。現在、東京と北海道の大学で「パラリンピック概論」の講義を行い、障がい者スポーツ・パラリンピックへの理解を広げるとともに、2030年札幌冬季オリンピック・パラリンピック招致に向け尽力中。

｜チャレンジの足跡｜クロスカントリースキー経験を活かして、特別区の職員の傍ら東京都スキー連盟のジュニア強化に関わっていたことから、1998年長野パラリンピックに向けてヘッドコーチを依頼され、「日頃、指導している中高生と一緒にトレーニングできれば」と快諾。ところが1996年当時、パラリンピックの関係者は福祉・医療業界が中心でクロスカントリースキー、バイアスロンの経験は皆無。選手だけでなく、ガイドやコーチ、スタッフも不足。全くのゼロからのスタートとなった。時に道の駅や道端で障害のある若者に声をかけて選手にスカウトすることも。パラリンピック6大会連続出場で、2010年バンクーバーと2018年平昌の2大会で金メダルに輝いた新田佳浩選手も全国津々浦々手を尽くして探し出した選手のひとりだ。

「まずは人を集めなければ。そのためにはどうしたらいいのかをいつも考えていた。でも情熱さえあればそこに色々なものが磁石のように集まってくる。まさに“情熱は磁石だ”」と荒井さんは当時を振り返る。

長野までわずか2年余りだったが、障害を懸命に理解した上での長所を伸ばす熱心な指導により、井口深雪(旧姓小林)さんが金メダルを獲得する大活躍となった。その後、2002年ソルトレーク、2006年トリノ、2010年バンクーバー、2014年ソチ、2018年平昌までの20年、パラノルディックスキーの日本代表監督を務め、日本のパラスキーを牽引。

選手強化の傍ら、周辺のサポートスタッフ含め企業に勤めながら競技に専念できる環境を作りたいと、2004年11月に夏冬競技合



わせて日本で初めてのパラリンピックを目指す実業団「チームAURORA(アウローラ:イタリア語で夜明け)」を株式会社日立ソリューションズに設立。その監督に江東区の職員から転身して自ら就任。企業スポーツとして継続させるには社員の理解・支援が欠かせないと、チーム発足と同時に社員後援会を結成。「入会率、社員の応援の数を、チームへの評価にもらった」そうで、社員への理解を深める活動などが奏功し、今では社員の過半数が入会するほどの支持率を獲得。2014年にはチームに「車いす陸上競

技部」も加わり、夏と冬のパラリンピックで社員の求心力を高める存在となる。

さらにパラノルディックスキーの勝負の鍵を握ると言われるスキー板のワックスやストラクチャー(滑走面の溝)をコースや緻密な気象条件と照らし合わせながら調整。また選手の障害の程度に応じた係数を反映しリアルタイムに順位が確認できるシステムの開発など、日本チームのコーチたちと共に日本の企業を巻き

込んで競技技術の向上にも貢献。「どうしたら選手が良くなるかと考えるだけで、面白いし、夢がある」と口元をほころばす荒井さん。北海道開拓団だった家系や小さい頃に育った環境などの影響か、何事にも好奇心を持ち、人が苦勞に思うことも楽しんでしまえるそうで、持ち前の開拓者魂と磁石のように人を惹きつけてやまない情熱で、いまだに障がい者スポーツの環境改善や地元・北海道での冬季オリンピック・パラリンピック開催&メダリスト輩出に向け、まずはジュニアの発掘と指導者の育成に奮闘を続けている。

平昌オリンピックのスピードスケートマススタートおよび チームパシュート競技へ向けたレース分析サポート

日本スケート連盟スピードスケート科学サポートチーム

担当業務	平昌オリンピック時の役職
紅椽 英信 <small>こうぼい ひでのぶ</small>	統括, 撮影・分析 日本スケート連盟(スピードスケート科学責任者), 相澤病院
熊川 大介 <small>くまがわ だいすけ</small>	撮影・分析 日本スケート連盟(スピードスケート科学スタッフ), 国士舘大学
加藤 恭章 <small>かとう たかのり</small>	撮影・分析 日本スケート連盟(スピードスケート科学スタッフ), 国立スポーツ科学センター
皆川 唯 <small>みなかわ ゆい</small>	撮影・分析 日本スケート連盟(スピードスケート科学スタッフ)
斉川 史徳 <small>さいかわ ふみのり</small>	撮影・分析 日本スケート連盟(スピードスケート科学スタッフ), 松本市役所
横山 瑠衣 <small>よこやま るい</small>	撮影・分析 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンスサポート事業スタッフ
横澤 俊治 <small>よこざわ としはる</small>	LPM, 風洞実験, パシュート戦略 国立スポーツ科学センタースポーツ研究部
山辺 芳 <small>やまのべ かおる</small>	風洞実験 国立スポーツ科学センタースポーツ科学部

| チャレンジの足跡 | 日本のスピードスケート競技では古くからスポーツ科学者が協力して選手やチームをサポートしていた。それを組織として系統立てたのが、メダルがゼロで終わった2006年トリノの翌年に作られた科学班だ。その後、2010年バンクーバーで一時持ち直すも、2014年のソチで再びメダルはゼロに。そこで2018年平昌に向け、“勝つ”と言う目標を明確に掲げ、抜本的な組織の構造改革を実施。科学班も再編され、現場との距離が近くなりデータを活用しやすい環境が整えられた。

科学班は、ナショナルチームの合宿や遠征など、年間を通してチームに帯同し、滑走映像の収集・分析を進めるほか、国立スポーツ科学センターの協力を得て開発した位置計測システムの活用や風洞実験によって得た科学的知見をコーチや選手にフィードバック。平昌オリンピックスピードスケート競技における日本のメダルラッシュを支えた。

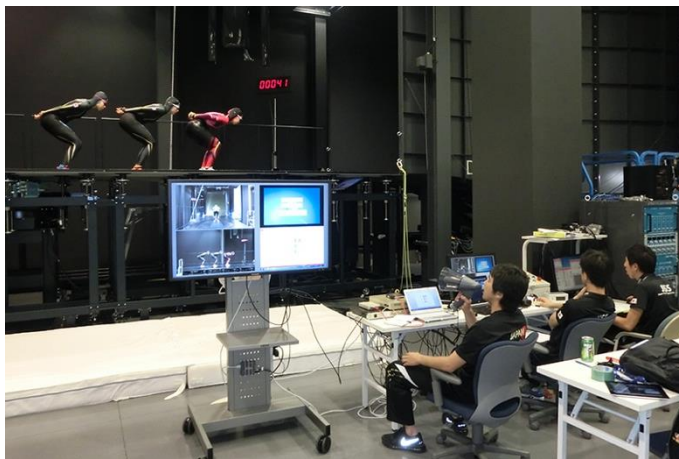
「共に考えているという感覚は持っているが、正直我々のデータ分析がメダルに貢献したとは思っていない。少なくとも足を引っ張っていない程度。科学班の能力が格段に上がったわけでもない。カメラの画像処理能力が高くなったなどの技術進歩やマイナーチェンジはあるが、こういう形でやろうという観点やそもそものポリシーは、これまでのものを受け継いでいる。データを積極的に活用してくれる外国人コーチや、選手個人の能力や意識の向上、そしてデータを提供する我々も、どう伝えるとコーチや選手が活用しやすいかを考慮するなど、従来からの日本の技術力がうまく活かせる環境になってきただけ」と技術班の責任者・紅椽英信さんは謙遜する。

例えば女子チームパシュート。先頭に出た時に最高スピードで走れるよう、先頭でない時にどれだけ体力を温存できるか、空気抵抗を極力避けた隊列が鍵となる。前後に多少離れても空気抵抗は増えないが、左右に数十センチぶれるだけで、一人で走行しているのと同じくらいの抵抗を受けることが風洞実験にて明らかに。そこから滑走時の間隔や姿勢を導き出した。

また隊列が大きく乱れ空気抵抗を増すのが、先頭交代時だ。後ろに下がる選手が速度を落とし他の2人から離されたり、先頭交代の前に速度が下がりがラップタイム自体が落ちるケースがあった。そこで位置計測システムを用い、滑走軌跡や滑走速度を算出、先頭交代時のコースロス、速度変化を定量化。そして先頭が走行速度を維持したまま数メートル大きく外に広がってから最後尾に速やかに着く、走行距離は伸びるが、速度の変化なしに交代できる戦術をとったのだ。さらに誰が先頭で何周滑るのがベストなのかの滑走パターンも検証。

「パシュートの戦術は、ソチの前から。かつては仮説に過ぎなかったが、今では科学的に検証できるのでコーチや選手の信頼度が違う。実は、我々と同じ作戦をとっているチームは結構ある。しかし実践するのはかなり難しい。大きく横に出すぎて追いつけなかったら、という恐怖感がある。練習を重ねないと難しいし、何より、日本人の侘び・寂びではないが、相手を思いやる阿吽の呼吸がなければ不可能」(紅椽さん)

選手・コーチ・組織、そして科学的なデータ全てが絡み合い、“和の力”を結集し“勝つ”と言う目標を達成したのであった。



■歴代受賞者（敬称略）

第1回 平成20年度	功労賞	中野 政美（柔道指導者） 女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展
	奨励賞	丸山 弘道（車いすテニス指導者） 北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ
第2回 平成21年度	功労賞	塚越 克己（スポーツ医・科学研究者） 日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」
	奨励賞	増田 雄一（アスレティックトレーナー） トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み
第3回 平成22年度	功労賞	高田 静夫（サッカー審判員） 日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用
	奨励賞	中村 宏之（陸上指導者） 雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践 中北 浩仁（アイススレッジホッケー指導者） 強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第4回 平成23年度	功労賞	岸本 健（スポーツ写真家） スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
	功労賞	水谷 章人（スポーツ写真家） 独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
第5回 平成24年度	功労賞	樋口 豊（フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者） 国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献
	奨励賞	江黒 直樹（ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ） 「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦
第6回 平成25年度	功労賞	臼井 二美男（技師研究員、義肢装具士） スポーツ用義足の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦
	奨励賞	東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部 戦略広報という立場から東京 2020 招致を支えたプロフェッショナル
第7回 平成26年度	奨励賞	妻木 充法（医学療法士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、日本体育協会公認アスレティックトレーナーマスター） 公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術 門田 正久（理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、日本障がい者スポーツ協会公認スポーツトレーナー、介護予防主任運動指導員） 障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み
	功労賞	藤原 進一郎（日本障がい者体育・スポーツ研究会 元・理事長、日本障がい者スポーツ協会 元・理事、技術委員会 元・委員長、日本パラリンピック委員会 元・運営委員、極東・南太平洋身体障害者スポーツ連盟 スポーツ委員会 元・委員長） 「すべての障がい者の生活者にスポーツを——」その信念を貫いた 40 年
第8回 平成27年度	奨励賞	中島 正太（15 人制男子ラグビー日本代表チーム／7 人制男子ラグビー日本代表チーム アナリスト） 先端技術を駆使したデータ分析で、ラグビー日本代表の躍進に貢献
	功労賞	今村 大成（株式会社タマス 取締役/Tamasu Butterfly Europa GmbH 社長） 日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける「デュッセルドルフの父」
第9回 平成28年度	奨励賞	野口 智博（日本大学文理学部 教授/木村敬一選手パーソナルコーチ） 障害者スポーツ全体の課題に先鞭をつけた挑戦 ～トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ～
	奨励賞	狩野 美雪（デフバレーボール日本代表女子チーム 監督） トップ選手の経験を活かした指導でデフバレーボール日本女子代表を金メダルに導く